

## 真つ白な糸を 生み出すために

一面に広がるクワ畑で、緑色の葉が風に揺れている。そのそばにある蚕室に近づいてみると、サワサワサワと、心地良い音が耳に入ってくる。そこにはクワの葉を食べているカイコの姿が。インド南部のカルナタカ州。インド有数の養蚕地帯だ。



JICAの支援で開発された二酸化性生糸を繰り取る多糸機（上写真）と従来機（下写真）を比べて品質向上した

を巻き取ってできたもの。真つ白な生糸は、その品質の高さから市場でも評判が良い。しかしそれも最近の話。インド南部で20年以上、養蚕を営む男性は「新しい技術を導入して収入が2倍になった。借金を返して、電話もバイクも買って、生活が豊かになった」と誇らしげに話す。

だ。群馬県富岡市の「富岡製糸場」は有名だが、時代の流れとともに、日本の蚕糸業は衰退している。しかしその日本の技術が、海を超えて、世界有数の生糸の生産地、インドで生きていく。インドの生糸生産の歴史は日本よりも古い。主に黄色がかつた多化性生糸<sup>※1</sup>を生産。白くて強度がある二酸化性生糸<sup>※2</sup>は、中国からの輸入に頼っていた。そこでインド政府は、二酸化性生糸の国内生産に向けた支援を日本に要請。1991年に技術協力が始まった。

# History

次世代への財産



## インドで生き続ける 日本の養蚕技術

インドの女性が身につけるサリー。その織物には、インド伝来の生糸ではなく、良質な二酸化性生糸が使われている。その二酸化性生糸の生産には、日本人が伝えた養蚕技術が生きている。

メなのか、納得させるまで説明する必要がありました。日本で衰退の一途をたどっていた養蚕に力を注いできた河上さんにとっては、インドでのプロジェクトは大変重い責任を感じるものだった。

### JICAファーマーから 広まる技術

日本では古くから二酸化性生糸を生産していたが、インドは気候風土がまったく違う。そこでまず、JICAが取り組んだのは、日本の技術を活用した「熱帯二酸化性養蚕」の技術開発。インド繊維省中央蚕糸局とともに試行錯誤を重ね、6年かけて、インド版の養蚕技術を生み出していった。

その次のステップは、新しい技術の普及だ。しかし養蚕農家といっても、その数は南部3州だけでも50万戸ほどある。そこでJICAが採用したのは、3州10カ所をモデル農家として選定し、日本人専門家が徹底的に技術指導を行うという方法。そして、JICAファーマーと呼ばれるモデル農家が中央蚕糸局の人々とともに、近隣の農家を指導するという仕組みを作った。

クワの栽培方法、カイコの飼育法、病害の防除法、農家の人々にとっては新しいことばかり。「カイコの飼育は約30日かけて行うのですが、最初のころは、2日に1回は農家に足を運び、手取り足取り指導しました。国土が広いため移動距離も長くて大変でしたが、とにかく必死に走り回りました」と河上さんは話す。



カイコの飼育は棚のある蚕室で行われる。日本人専門家の指導により、マユ生産の成功のカギを握る消毒が徹底されるようになった（撮影：谷本美加）

だという。「ほとんどの農家が、カイコを飼う建物の床や竹製の飼育皿に牛のフンを塗っていました。ヒンドゥー教では牛は神の使いとあがめられています。お守りの意味を持つようですが、衛生的に良くないことは明らか。でも、宗教的な慣習については日本人が反対することは難しかった。そこで、まずは中央蚕糸局のカウンターパートに話をし、彼らから農家に伝えてもらうことに。「現地の人たちも最初は疑心暗鬼でしたが、新しい技術を導入した農家は、どんどん収入が増えていった。それを見てみんな本気で取り組むようになりましたね」と河上さん。中央蚕糸局のカウンターパートを日本に呼び、長野県など国内各地の養蚕農家での研修も行った。

力。今年8月、5年ぶりにインド南部の養蚕農家を訪れた河上さんが目にしたものは、それは、日本とインドが一緒に築き上げてきた技術が、現地の人々の手で着実に引き継がれている光景だった。「新しい技術の普及は、文化と文化の摩擦でもある。正直苦勞も多かったのですが、協力の成果が現地に根付き、さらに発展を遂げていることは何よりの喜びです」と目を細める。

※1 1年間に2回以上の世代を繰り返すカイコのマユからとれた生糸。黄色がかっており品質は劣るが熱帯での飼育に向いている。  
※2 1年間に2回世代を繰り返すカイコのマユからとれた生糸。色は白く品質が良く、織物のタテ糸に向いている。